

第 15 回 国際日本学シンポジウム「フランスへの憧れー生活・芸術・思想の日仏比較ー」
「中原淳一と 1950 年代初頭のパリ」

2013 年 7 月 6 日（土）

田中琢三（お茶の水女子大学）

<発表の概要>

1930 年代から 60 年代半ばにかけて、イラストレーター、ファッションデザイナー、人形作家、雑誌編集者などとして活躍した中原淳一（1913-1983）は、1951 年 4 月に初めて渡仏し、翌年 6 月まで約 1 年 2 ヶ月パリに滞在した。中原はパリに何を求め、パリで何を見て、パリのいかなるイメージを日本に伝えたのだろうか？中原と同時期にパリに滞在していた女優の高峰秀子のエッセイ『巴里ひとりある記』（1953）も参照しながら、戦後間もない 1950 年代初頭における日本人とパリの関係について考える。

<中原淳一・年表>

- 1913 年（大正 2 年）0 歳：香川県で生まれる。
1915 年（大正 4 年）2 歳：徳島県徳島市に移住。
1917 年（大正 6 年）4 歳：一家で洗礼を受ける。
1920 年（大正 9 年）7 歳：父が他界。徳島市内の宣教師ランプキン宅に転居。
1923 年（大正 12 年）10 歳：広島県広島市の広島女学院の院長スチュアート宅に転居。同時に広島女学院附属小学校に転入。
1926 年（昭和元年）13 歳：母とともに上京。
1928 年（昭和 3 年）15 歳：私立日本美術学校絵画科に入学。
1930 年（昭和 5 年）17 歳：上野の高級洋服店の専属デザイナーになる。
1932 年（昭和 7 年）19 歳：銀座の松屋で「第一回フランス・リリック人形展覧会」を開催。それが契機となって雑誌『少女の友』の挿絵を手がけるようになる。
1939 年（昭和 14 年）26 歳：麹町にブランドショップ「ひまわり」開店。
1940 年（昭和 15 年）27 歳：『少女の友』を降板。宝塚歌劇団の元男役のスター葦原邦子と結婚。
1945 年（昭和 20 年）32 歳：召集されて横須賀海兵団に入隊。
1946 年（昭和 21 年）33 歳：季刊の婦人雑誌『ソレイユ』創刊（後に『それいゆ』と改題、1956 年からは隔月刊、1960 年まで刊行）。
1947 年（昭和 22 年）34 歳：月刊の少女雑誌『ひまわり』創刊（1952 年まで刊行）。
1950 年（昭和 25 年）37 歳：日本初の本格的ミュージカル「ファニー」を上演。
1951 年（昭和 26 年）38 歳：4 月に渡仏し、翌年 6 月までパリに滞在。
1954 年（昭和 29 年）41 歳：隔月刊の少女雑誌『ジュニアそれいゆ』創刊（1960 年まで刊行）。
1958 年（昭和 33 年）45 歳：心筋梗塞で倒れる。
1961 年（昭和 36 年）48 歳：千葉県館山市で療養生活を始める。
1964 年（昭和 39 年）51 歳：再び渡仏し、半年間ほどパリに滞在。
1965 年（昭和 40 年）52 歳：隔月刊の婦人雑誌『女の部屋』を創刊（翌年に廃刊）。
1983 年（昭和 58 年）70 歳：館山市で永眠。

〈『それいゆ』 1952 年・春の号 「フランス特集」 目次〉

「SOLEIL PATTERN」

「パリの学生達の生活」 (芹沢光治良)

「パリの生活ダイジェスト」

結婚：渡辺紳一郎、芝居：北村喜八、ふだん着：藤原あき、娯楽：大久保泰、
美術：森田元子、お菓子屋：葦原英了、モード：高野三三男、研究所生活：宮
田重雄。管楽器：深尾須磨子)

「私の巴里便りから」 (高野耀子)

「アンドレ・ジイドの作品を読む人、読みかえす人たちに」 (佐藤朔)

「シャンソンと風」 (高英男)

「フランスを語る」

巴里の画室：荻須高德 (画家) 1948-1952 (在巴里)

私の巴里：長岡輝子 (演出家) 1928-1930

懐しき巴里を思う：辰野隆 (仏文学者) 1921-1923

のんびりした巴里：石井好子 (歌手) 1951-1952 (在巴里)

巴里のレビュー：高木史郎 (宝塚演出家) 1951-1952 (在巴里)

パリーの面影：浅野千鶴子 (声楽家) 1937

フランス旅行の収穫：裕伊之助 (画家) 1950-1951

私のフランス生活：高峰秀子 (映画女優) 1951

「巴里の住い方から思うこと (特集・愉しく新しく)」 (中原淳一)

「巴里で買った私のブラウス」 (高峰秀子)

「パリ通信 (その二)」 (中原淳一)

パリの子供は生きているフランス人形

ファッション・ショーの舞台になるシャンゼリゼの大通り

パリの婦人のおしゃれ精神と豪華趣味

犬はパリ婦人の大切なアクセサリーの一つ

パリジャンのおしゃれさまざま

「私の巴里生活」 (在巴里・声楽家 砂原美智子)

「男の長い髪・女の短い髪」 (中原淳一)

「たそがれのセーヌ」 (深尾須磨子)

「思い出の巴里を描く」

巴里の冬景色から (宮本三郎)

私のパリー日記より (木下孝則)

モンマルトル (佐藤敬)

「パリの美容いろいろ」 (マヤ・片岡)

「パリの町をゆく」 (解説：蘆原英了)

「フランス映画傑作集」

「フランス映画の見方」 (岡田真吉)

「巴里の香水屋さん」 (マダム・マサコ)

「フランスの主婦と家庭料理 一週間の献立とその作り方」 (チリビ・キク)

「座談会・巴里の働く婦人と語る」 (司会・中原淳一)

〈1950年代初頭のパリにいた著名な日本人〉

藤田嗣治（1886-1968）：画家。1940年5月にパリ陥落の直前に脱出し帰国。1950年2月にパリに戻る。1955年にフランス国籍を取得。1961年からパリ郊外のヴィリエ・ル・バクルに隠棲。

高田博厚（1900-1987）：彫刻家。1931年からパリに暮らす。1944年8月末、日本大使館の要請でパリを脱出。ドイツでの収容所生活を経て1946年末にパリに戻る。1950年エッセイ集『フランスから』（みすず書房）を刊行。1967年に帰国。

荻須高德（1901-1986）：画家。1948年に画家として戦後初めてフランスに入国。死去するまでパリに定住し活動を続ける。

佐野繁次郎（1900-1987）：画家。1937年に渡仏しアンリ・マティスに師事。1939年に帰国するが、1951年に再び渡仏し、1953年までパリに滞在。

関口俊吾（1911-2002）：画家。1935年に日仏交換学生として渡仏。日仏開戦前に帰国するが、1951年8月に再び渡仏し、その後死去するまでパリで活動する。パリ滞在は計60年に及ぶ。

石井好子（1922-2010）：シャンソン歌手。1951年末に渡仏し、翌年パリで歌手としてデビュー。1955年にパリのキャバレーの舞台裏を描いたエッセイ『女ひとりの巴里ぐらし』（鱒書房）を刊行。料理のエッセイでも有名。

高英男（1918-2009）：シャンソン歌手。1951年4月に中原淳一と同じ飛行機で渡仏し、ソルボンヌ大学に学ぶ。翌年6月、中原と同じ飛行機で帰国。

砂原美智子（1923-1987）：オペラ歌手。1952年に渡仏し、同年パリのオペラ・コミック座で『蝶々夫人』に出演。

黛敏郎（1929-1997）：作曲家。1951年8月からフランス政府給費留学生としてパリに留学。予定を切り上げて1年で帰国。

高橋とよ（1903-1981）：女優。1951年10月から約8ヶ月パリに滞在。1953年に高橋豊子名義で『パリの並木路をゆく』（学風書院）を刊行。

高峰秀子（1924-2010）：女優。1951年6月から同年11月までパリに滞在。1953年に『巴里ひとりある記』（世界映画社、2011年に新潮社から新装版）を刊行。

木下恵介（1912-1998）：映画監督。フランス映画を実地に調査研究するために1951年10月に横浜から船に乗り、1951年11月にパリに到着。翌年7月に横浜へ帰着。

笹本駿二（1912-1998）：ジャーナリスト、評論家。ヨーロッパに50年以上滞在。

加藤周一（1919-2008）：評論家。1951年から1955年までフランス政府給費留学生としてパリのパストゥール研究所に留学。

森有正（1911-1976）：フランス文学者。1950年に戦後初のフランス政府給費留学生としてパリに留学。そのまま帰国せずフランスに定住。

朝吹登水子（1917-2005）：フランス文学者、翻訳家。1936年から1939年までパリに滞在。1950年に再びパリへ渡り、その後フランスに定住。1955年にフランソワーズ・サガンの『悲しみよこんにちは』を翻訳し、ベストセラーになる。

芹沢光治良（1896-1993）：作家。1925年にソルボンヌ大学に留学。1927年に肺炎のためパリを離れスイスなどで療養。1928年に帰国。1951年5月から10月にかけてヨーロッパ旅行を行い、約4ヶ月パリに滞在する。1952年にその旅行中に書いた記事をまとめた『ヨーロッパの表情』（中央公論社）を刊行。

三島由紀夫（1925-1970）：作家。ヨーロッパ旅行中の1952年3月3日から4月19日にかけてパリに滞在。